

RMS *Empress of Australia* (1919)

From Wikipedia, the free encyclopedia

RMS *Empress of Australia* was an ocean liner built in 1913–1919 by Vulcan AG shipyard in Stettin, Germany (now Szczecin, Poland) for the Hamburg America Line.^[1] She was refitted for Canadian Pacific Steamships; and the ship – the third of three CP vessels to be named *Empress of China*^[2] – was renamed yet again in 1922 as the *Empress of Australia*.^[3]

In trans-Pacific service, the ship garnered fame for her part in rescue efforts at Tokyo following the Great Kanto earthquake of 1923.^[4]

In trans-Atlantic service, she earned distinction in 1927 by bringing the Prince of Wales from England to the Diamond Jubilee celebrations in Canada. She was honoured to serve as Royal Yacht during the Royal tour of Canada in 1939.^[4]

Contents

- 1 Service history
 - 1.1 Pre-Canadian Pacific ownership
 - 1.2 Canadian Pacific ownership
 - 1.3 From near disaster to great distinction
 - 1.4 Atlantic crossing and royal patronage
 - 1.5 Second World War service
 - 1.6 Post-war service
- 2 Technical
 - 2.1 Power plant and propulsion system
- 3 See also
- 4 Notes
- 5 References
- 6 External links

Service history

The ship was originally built for the Hamburg America Line by Vulcan AG shipyard, Stettin, Germany (now Szczecin, Poland), in 1912, as yard number 333.^[1]

Pre-Canadian Pacific ownership

The partially completed hull was launched on 20 December 1913. During this period, it was the intention of the Hamburg America Line to name the completed ship the SS *Admiral von Tirpitz* in honour of Alfred von Tirpitz. Later, the prospective name of the ship was shortened to simply the SS *Tirpitz*, but final outfitting was held up during World War I.



During fitting out at the AG Vulcan shipyard, Stettin, circa 1912

History

Name:	1913–1921: SS <i>Tirpitz</i> 1921: SS <i>Empress of China</i> 1922–1952: RMS <i>Empress of Australia</i>
Owner:	1913–1919:  Hamburg America Line 1920–1921:  P&O Line 1921–1952:  Canadian Pacific
Port of registry:	1913–1919: German Empire 1920–1921: United Kingdom 1920–1929: Canada
Builder:	Vulcan AG shipyard, Stettin (now Szczecin), Poland
Yard number:	333
Launched:	20 December 1913
Maiden voyage:	1 December 1919
Fate:	1952: scrapped at Inverkeithing, Scotland

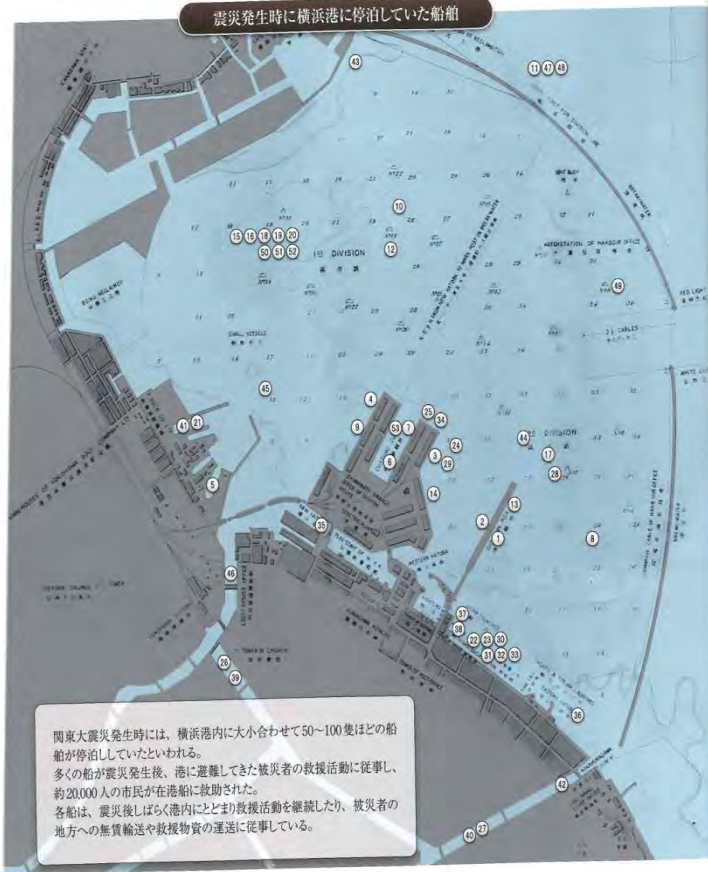
General characteristics

Class and type:	Ocean liner
Tonnage:	21,861 tons
Length:	187.45 metres (615.0 ft)
Beam:	12.8 metres (42 ft)
Propulsion:	DE and 6 SE boilers Two sets of steam turbines, turning twin propellers
Speed:	19 knots (35 km/h; 22 mph)
Capacity:	400 1st-class, 150 Tourist-class, 635 3rd-class
Crew:	520 officers & crew

在港船の救援活動

番号	船名	船会社	トン数	活動内容	出典
1	エンプレス・オブ・オーストラリア	カザデンパシフィックライン(英)	21,860総トン	1日午後8時までに約3,000名を収容。8日神戸に向け、被災者約1,000名を無償輸送	①②
2	アンドレ・ルボン	メサジュリマリタイム(仏)	13,682総トン	1日夕方までに約2,000名を収容。11日神戸に向け、被災者約1,000名を無償輸送	①③
3	これや丸	東洋汽船	11,809総トン	海軍関係諸官庁の本部署事務所となり、船内の無線で横浜の災害状況を阪神地方に打電。横浜からの第一信となる	①④
4	三島丸	日本郵船	7,904総トン	3,000名の避難者を収容し、500名の負傷者を救助。7日までの収容延べ人数は4,000名に達し、救助した被災者には炊き出しを行った。港務部・税関海軍部等の事務所が置かれ、海上行政の中核となった	①③
5	りま丸	日本郵船	7,249総トン	船内で延べ415名の傷病人の手当てを行う	①
6	ばりい丸	大阪商船	7,197総トン	1,800余名の被災者を船内に救助し港外に避難。船倉内の米800余トンを供出。陸上被災者に炊き出しを行う。横浜停泊中神奈川県及び大阪府の救護本部にあてられた	①③
7	ろんどん丸	大阪商船	7,191総トン	2,000余名の被災者を救助し、600名余の被災者を載せ、6日未明に大阪に帰港	①②
8	りおん丸	日本郵船	7,017総トン	1日夕刻までに被災者82名を収容し、数日間炊き出し	①③
9	丹後丸	日本郵船	6,883総トン	1日夕刻までに1,000名を救助。負傷者に治療を行い、8日まで炊き出し	①④
10	寶水山丸	三井物産	6,079総トン	約400名の被災者を船内に収容	③
11	セミラミス	サミュエルサミュエル商会(英)	5,792総トン	多数の被災者を救助。ベンジン油満載であったため港内航行の各発動機関に運転用の油を無償配給	②
12	綾葉丸	辰馬汽船会社	5,724総トン	1日午後8時ごろまでに被災者約70名を収容し、8日まで炊き出し	③
13	スチール・ナビゲーター	アメリカ製鉄会社	5,719総トン		④
14	セルマシティ	アメリカ製鉄会社	5,686総トン		①
15	ベングロー	英国汽船	5,318総トン	被災者137名を救助。9月5日まで船内で留め置く	①
16	甲陽丸	神戸棧橋	3,010総トン	被災者20名を救助	①
17	湖南丸	大阪商船	2,664総トン	米数白飯を供出し山下町埋立地等に集まった被災者に配給。5日夜に被災者を載せ出港、大阪に帰着。折り返し救護品を載せて横浜港へ戻る	①②
18	日英丸	濱口汽船	2,233総トン	被災者180名を救助	①
19	中華丸	山下汽船会社	2,191総トン	1日午後9時ごろまでに被災者約150名を救助。4日まで炊き出し	①②
20	大進丸	内田汽船	989総トン	被災者10名を救助	①
21	筑波丸	千代田汽船	994総トン	被災者102名を収容し炊き出し	③
22	水代丸	日本郵船	94総トン	沖合の船と海岸通りを結ぶ連絡船として被災者の収容救助と送迎にあたる	②
23	鶴見丸	日本郵船	98総トン	沖合の船と海岸通りを結ぶ連絡船として被災者の収容救助と送迎にあたる	②
24	吾妻丸	東洋汽船	38総トン	これや丸と協力し、被災者1,082名救助	③
25	桂島丸	大阪商船	32総トン	米大使館員婦人他100余名を救助し棧橋方面に避難	②
26	金剛丸	共同運輸会社	28総トン	柳橋付近で川に流されてきた被災者を霧島丸とともに救助。約800名に炊き出し	③
27	第1徳丸		26総トン	被災者約300名をエンプレス・オブ・オーストラリア号に移送。2日から10日まで被災者の無償輸送に従事	②
28	末広丸	関東運輸会社	20総トン	被災者約150名を湖南丸に移送	②
29	都丸		小型蒸気船	これや丸と協力し、被災者1,082名救助	②
30	柳丸	日本郵船	小型蒸気船	沖合の船と海岸通りを結ぶ連絡船として被災者の収容救助と送迎にあたる	②
31	栄平丸	日本郵船	小型蒸気船	沖合の船と海岸通りを結ぶ連絡船として被災者の収容救助と送迎にあたる	②
32	雲雀丸	日本郵船	小型蒸気船	沖合の船と海岸通りを結ぶ連絡船として被災者の収容救助と送迎にあたる	②
33	妙見丸	日本郵船	小型蒸気船	沖合の船と海岸通りを結ぶ連絡船として被災者の収容救助と送迎にあたる	②
34	桜島丸	大阪商船	小型蒸気船	米大使館員婦人他100余名を救助し棧橋方面に避難	②
35	新天丸	山口船部	小型蒸気船	東渡止場裏手付近で海中から36名を救助	②
36	スベンドロフ	山口船部	小型蒸気船	新天丸から救助された被災者を収容	③
37	船第294号	ヘルム商会		港内での救助活動に従事	②
38	船第309号	ヘルム商会		港内での救助活動に従事	②
39	霧島丸	国際運輸会社		柳橋付近で川に流されてきた被災者を金剛丸とともに救助。約800名に炊き出し	③
40	まつ丸	海組		11月4日付近川岸に係留中罹災。被災者約180名を東洋汽船これや丸に移送	②
41	六甲丸	日本郵船		被災者31名を収容し炊き出し	②
42	明治丸	明治運輸		谷戸橋、前田橋付近で、被災者60名を救助	②
43	第6保存丸	吉田回漕店		東高島駅構内右炭貯蔵所付近で被災者100名を救助。横浜船渠停泊中の南洋丸に移送	②
44	福丸	関東運輸会社		被災者約30名を山下町埋立地に移送	③
45	大川丸	村山回漕店		被災者33名を救助	②
46	第11号旭丸	旭組回漕店		被災者40名ずつ合計約300名を日本郵船三島丸に移送	③
47	アイリッシュ	サミュエルサミュエル商会(英)		多数の被災者を救助。ベンジン油満載であったため港内航行の各発動機関に運転用の油を無償配給	②
48	チサラク	ウィルスム商会(蘭)		1日夕刻までに被災者約900名を救助。3日東京芝浦に向けて被災者輸送	①③
49	富丸			被災者50名を救助	①
50	明元丸			被災者40名を救助	①
51	索海丸			被災者50名を救助	①
52	ペンリオック			被災者97名を救助	①
53	ヤマ				①

関東大震災発生時に横浜港に停泊していた船舶とその救援活動



震災発生時に横浜港に停泊していた船舶

- 注1 明治14年の関東大震災時に横浜港内に停泊していたという記載がある船舶も、①「横浜商震災誌」、②「神奈川県下の大火災と警報」、③東京日日新聞、④「日本大震災救助活動報告集」THE JAPANESE EARTHQUAKE THE FIRE AND SUBSEQUENT RELIEF OPERATIONS から作成した
- 注2 停泊船は、注1の資料に準拠、厚紙等の記載があるものはその位置に番号を示した
- 注3 停泊船が不明なものは「横浜改良設備誌」(1910年記載の「停泊中の船舶の位置図」)より、船舶が可能な範囲に配置した

在港船舶の救援活動

- 注1 明治14年の関東大震災時に横浜港内に停泊していたという記載がある船舶も、①「横浜商震災誌」、②「神奈川県下の大火災と警報」、③東京日日新聞、④「日本大震災救助活動報告集」THE JAPANESE EARTHQUAKE THE FIRE AND SUBSEQUENT RELIEF OPERATIONS から作成した
- 注2 表中の番号欄の番号と「震災発生時に横浜港に停泊していた船舶」の図中の番号は一致する
- 注3 色帯欄の数字は注1の資料を示す
- 注4 ①「横浜商震災誌」には、少彦丸、貫水丸、東山丸、東海丸、しんご丸、たすま丸、新巻丸、東代丸が被災者救助に当たった旨の記述があるが、同書に同日の日に停泊していたと記載された救助活動を行った船舶は記載されておらず、また色帯欄の数字も一致しない。他の資料で同日に横浜港内に停泊していたことが確認できる船舶については記載した
- 注5 表中の船名は船主の氏名に由来する。トン数が不明なものは、資料に基づいての記載があるものは、トン数欄に記載した
- 注6 船会社、船主名、活動内容が不明なものは空欄とした

在港船舶の救援活動

番号	船名	船会社	トン数	活動内容	出典
1	ムンブスオプノースタリフ	オパワック/オパワック(米)	21,860総トン	1日午後8時までに約3,000名を収容。8日神戸に向け、被災者約1,000名を無償輸送	①②
2	アンドレ・ルボン	メサヨリマ/メサヨリマ(仏)	13,682総トン	1日夕までに約2,000名を収容。11日神戸に向け、被災者約1,000名を無償輸送	①②
3	これや丸	東洋汽船	11,809総トン	港事務所臨時官庁本部事務所となり、船内の無償で横浜の災害状況を取手地方に打電。横浜からの第一船となる	①③
4	三島丸	日本郵船	7,904総トン	3,000名の避難者を収容し、500名の負傷者を救助。7日までの収容延べ人数は4,000名に達し、救助した被災者には炊き出しを行った。港務部・税関海軍部等の事務所が置かれ、海上行政の中心となった	①②
5	りま丸	日本郵船	7,249総トン	船内で延べ415名の傷病者の手当てを行う	①
6	ばりや丸	大阪商船	7,197総トン	1,800余名の被災者を船内に救助し港外に避難。船倉内の米800余トンを供出。陸上被災者に炊き出しを行う。横浜神田中華会川場及び大阪市の救護本部に於てられた	①②
7	ろんどん丸	大阪商船	7,191総トン	2,000余名の被災者を救助し、600名の被災者を救助。6日未明に大阪に帰港	①②
8	りおん丸	日本郵船	7,017総トン	1日夕までに被災者82名を収容し、数日炊き出し	①③
9	丹後丸	日本郵船	6,883総トン	1日夕までに1,000名を救助。負傷者に治療を行い、8日まで炊き出し	①②
10	貫水山丸	三井物産	6,079総トン	約400名の被災者を船内に収容	②
11	セミタマス	ザエムキヤビエリ商會(英)	5,792総トン	多数の被災者を救助。ベンジン油満載であったため港内航行の各動機機関に運転用の油を無償供給	②
12	綾葉丸	阪西汽船会社	5,724総トン	1日午後8時ごろまでに被災者約70名を収容し、8日まで炊き出し	②
13	スチールナビゲーター	アメリカ郵船会社	5,719総トン	アメリカ郵船会社	②
14	セルマシティー	アメリカ郵船会社	5,686総トン	アメリカ郵船会社	②
15	ペンダロー	英商汽船	5,338総トン	被災者137名を救助。9月5日まで船内で留め置く	①
16	甲陽丸	神戸汽船	3,010総トン	被災者20名を救助	①
17	瀧南丸	大阪商船	2,664総トン	米数百俵を供出し山下町難立地帯に集まった被災者に配給。8日夜に被災者を載せ出港。大阪に帰港。荷り運し救護品を載せて横浜港へ戻る	①②
18	日英丸	漢口汽船	2,233総トン	被災者80名を救助	①
19	中華丸	山下汽船会社	2,191総トン	1日午後9時ごろまでに被災者約150名を救助。4日まで炊き出し	①②
20	大高丸	内田汽船	989総トン	被災者10名を救助	①
21	眞波丸	千代田汽船	994総トン	被災者102名を収容し炊き出し	②
22	水代丸	日本郵船	94総トン	沖合の船と海岸通りを結ぶ連絡船として被災者の収容救助と送迎にあたる	②
23	鶴見丸	日本郵船	93総トン	沖合の船と海岸通りを結ぶ連絡船として被災者の収容救助と送迎にあたる	②
24	吾妻丸	東洋汽船	38総トン	これや丸と協力し、被災者1,082名救助	②
25	桂島丸	大阪商船	32総トン	米大粒飯糰100余名を救助し後備方面に避難	②
26	金剛丸	共同運輸会社	28総トン	柳瀬付近で川に流された被災者を獲り丸とともに救助。約800名に炊き出し	②
27	第1渡丸		26総トン	被災者約300名をエンプレス・オーストラリア号に移送。2日から10日まで被災者の無償輸送に従事	②
28	友広丸	関東運輸会社	20総トン	被災者約150名を浦南丸に移送	②
29	都丸			これや丸と協力し、被災者1,082名救助	②
30	柳丸	日本郵船		沖合の船と海岸通りを結ぶ連絡船として被災者の収容救助と送迎にあたる	②
31	栄平丸	日本郵船		沖合の船と海岸通りを結ぶ連絡船として被災者の収容救助と送迎にあたる	②
32	雲家丸	日本郵船		沖合の船と海岸通りを結ぶ連絡船として被災者の収容救助と送迎にあたる	②
33	妙見丸	日本郵船		沖合の船と海岸通りを結ぶ連絡船として被災者の収容救助と送迎にあたる	②
34	板島丸	大阪商船		米大粒飯糰100余名を救助し後備方面に避難	②
35	新天丸	山口郵船部		東渡止地帯裏手付近で海中から36名を救助	②
36	スペンドリフ	山口郵船部		新天丸から救助された被災者を収容	②
37	野船第294号	ヘルム商會		港内での救助活動に従事	②
38	野船第309号	ヘルム商會		港内での救助活動に従事	②
39	壽島丸	国際運輸会社		柳瀬付近で川に流された被災者を金剛丸とともに救助。約800名に炊き出し	②
40	まつ丸	船組		元町4丁目付近に停泊中震災。被災者約80名を東洋汽船これや丸に移送	②
41	六甲丸	日本郵船		被災者31名を収容し炊き出し	②
42	明治丸	明治運輸		谷戸橋、前田付近で、被災者60名を救助	②
43	第6保存丸	吉田洋行		東高島駅南石段野原付近で被災者100名を救助。横浜船渠停泊中の南洋丸に移送	②
44	丸丸	関東運輸会社		被災者30名を山下町難立地に移送	②
45	大川丸	日本郵船		被災者33名を救助	②
46	第11号丸	船組		被災者40名を合計約300名を日本郵船三島丸に移送	②
47	アリッシュ	ザエムキヤビエリ商會(英)		多数の被災者を救助。ベンジン油満載であったため港内航行の各動機機関に運転用の油を無償供給	②
48	チサラク	ウィルスマ商會(蘭)		1日夕までに被災者約900名を救助。3日東京芝罘に向け被災者輸送	②③
49	富丸			被災者50名を救助	②
50	明元丸			被災者40名を救助	②
51	雲海丸			被災者50名を救助	②
52	ペリリョック			被災者97名を救助	②
53	ヤマ				②

企画展

横浜港と関東大震災

— 震災からの復興 —





港ヨコハマをつくってきた
120年の物語。

企画展 日本の海の玄関

大さん橋物語

報道写真が映す戦後の横浜港

神奈川新聞社創業125周年記念

125
神奈川新聞



ISSN 0911-1956

月 報

Captain

第403号

平成23年6・7月号

〈特集〉東日本大震災を経験して



〈リオデジャネイロ〉

社団法人 日本船長協会
JAPAN CAPTAINS' ASSOCIATION